



北海道（桃色の想いで）
南海部 覚悟

素人旅人を標榜する筆者にも、憧れの理想系があります。

宮脇俊三と、フーテンの寅さんです。

宮脇俊三は、本邦初のトラベルライター——寅さんは、もう説明の必要もないでしょう。



ところでこの二人、“旅” というカテゴリーに於いて、恐らく分野の対極に位置します。

つまり、一方は自身の最も確実な存在意義としての “旅”。

片や、唯一の存在手法としての “旅”。

寅さんにとって、旅はやっぱり想像以上につらいものだったに違いありません。

柴又で、さくらやおいちゃん、おばちゃん、タコ社長たちに囲まれ、ひっそり穏やかに暮らしていけたら……悲しいかなそれが出来ないから、与えられた境遇を維持する唯一の手法が旅だったから、シリーズ映画になり毎年恒例となり、人々の笑いと涙を誘ったのでしょう。

寅さんの旅の、遣る瀬無い哀しさがそこにあります。

宮脇俊三にとって旅とは、頑なな拘りの極致でした。

氏の有名な著作 【最長片道キップの旅】 の中に、「——阿呆らしいことこの上ない。」というくだりがあります。

早朝の始発駅から列車を乗り継ぎ乗り継ぎ、丸一日をかけ最大に大廻りを辿って隣の駅まで戻ってくる。

車窓遠方のパラボラアンテナは、早朝始発駅から見た市役所屋上の通信アンテナそのものではないか、一日列車に揺られ、人の歩くほども移動していない、阿呆らしいことこの上ない。

列車に乗る行為そのものを、旅の目的と徹しうる覚悟が、氏の旅の存在意義であったと思います

。

男はつらいよシリーズ第一話に、寅さんが舎弟の登を、上野駅で怒鳴りつけるシーンがあります

。

一緒に連れて行ってくれと懇願する登を、頭ごなしに突きはねて、「ばか野郎！おめえはまだ若けえんだ、堅気に生きろ！俺みてえになっちゃなんねえんだ！」
・・・俺みてえになっちゃなんねえんだ。

この二人を理想系とする私の“旅”は、およそ40数年前、新築の香りがまだ仄かに残る、夕暮れの新大阪駅在来線ホームから、哀しく始まりました・・・。

受験生の私は、大阪の大学2校の受験を終え、電車で帰宅する途中です。

試験の感触が余り芳しくなかったことに、若い心は暗く塞ぎ込んでいました。

財布には、親から貰った小遣いが、まだ半分以上残っています。

大学受験も終わり、明日からは特にすることもない・・・。

雪まじりの寒風を引き連れ、長いプラットホームに朗々と滑り込んできたのは、鮮やかな碧い車体――寝台特急“日本海”でした。

停車時間は僅か30秒・・・中折れ式の自動ドアから漏れ出す暖気に誘われて、ふらふら乗り込んだその瞬間の記憶は、今思い返してもはっきりしません。

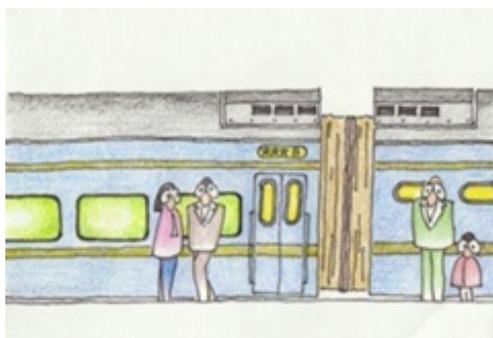
兎も角、その夜私は自宅へ帰る電車ではなく、青森行きのブルートレインに乗り込んでしまったのです。

東北の蒼い夜空が、白銀に明けてきました。
車窓の底をたおやかに覆うのは、昨日の夜の新雪です。

車掌に事情を説明し、空いていた寝台を取ってもらい、北海道まで行く旨を告げて、手持ちの小遣いで料金を払います。

このまま旅行を続けるには、とても足りない手持ちですが、幸い郵便貯金の通帳と印鑑を持っていました。

クレジットカードなどまだない時代です、高校三年間の貯金をすべて費やすつもりでいました。――それでも、列車電話で話した母の声は、途切れ途切れの雑音の向こうで心配そうでした。



やがて列車は雪霞の青森駅に滑り込み、旅中の話し相手となった同じコンパートメントの客に促されながら、連絡線の待つ棧橋へと向かいます。

春まだ遠い海峡の海は鉛色です、青函連絡船名物の“海峡ラーメン”で冷えた体を温めていると、隣のテーブルは朝から宴会で……。

「兄さん、こっち来て一緒に飲まないか？」

「――なんだ、兄さん北海道初めてか、俺たちみんな釣り仲間だね……毎年こうやって船の中で大酒飲んで……。」

「大学受験の帰りだって？発表は一週間後……じゃその間のはのんびり出来るわけだ。」

「高校卒業したんならもう大人だな、酒飲めるんだろ？――なんだって、まだ卒業してねえのか、じゃ薬だと思って飲んでみな……。」

酔客の一団をあしらうのに手を焼きながら、背後の大きな窓を見ると、白くこんもりと函館山が見えてきました。

――北海道でした。

夜行列車で早朝青森に着いても、函館に上陸するのは昼過ぎになります。

船中の酔客に教えられた通り、駅前の靴屋によって滑り止めのスパイクを買って靴底に装着します。

――たしか、踵を雪に突き刺すように歩くんだったな。

函館山の展望台から見下ろす半島のうなじは、まるで京都の舞妓のそれに似て青白く清冽です。

除雪された路面電車の軌道が、丁度ぼんの窪の筋のようにずっと北へ延びています。

あと二時間もここで頑張れば、有名な夜景を見ることもできますが、寒くてそんな気にもなれません。

ロープウェイ山麓駅の掲示板に、ほっこりとした露天風呂のポスターが・・・登別温泉。

明日は早起きして、登別に行ってみようと思い立ちました。

登別温泉

「――廊下を突き当たって左に階段を降りたところが、男湯の脱衣室ですから……タオルは部屋のを持って降りてくださいね。」

部屋担当の女中さんから促され、ヒグマがデザインされた大きな暖簾を潜って、待望の温泉に足を踏み入れます。

建物の一番下、半地階に設えられた広大な浴室は、薄暗い中に湯気が飽和して一見不気味な印象でしたが、泉質の違う様々な浴槽をハシゴするうち、体も上気して心地よさが五体を満たします。

一番奥のガラスドアの先に、深々と雪に包まれた露天風呂があるのに気が付きました。

ドアを開けると、火照った体に冷気が気持ちいい……岩風呂の岩上には一様にこんもりと雪帽子がかかり、眼下の小川からは、純白の湯気が立ち上って……。

――登別。

北海道中央南部のこの一帯には、15か所の源泉から実に9種類の泉質を湧出し、泉質湧出量とも大分の別府温泉と双璧をなす、わが国最大の温泉の一つです。

地獄谷という爆裂火口の縁に位置し、温泉最大のホテルは、その地獄谷に迫り出すように、巨大な建物群を配置しています。

比較的狭い谷間に、大規模なホテルや旅館が密集し、近くにはヒグマで有名なクマ牧場もあって、道央南部の有力な観光地となっています。

露天風呂の岩の間に腰を下ろし、やや熱めの湯に身を委ね、湯気を透かして前方を見た途端、ぎょっとして飛び上がりました。

――なんと、若い女性の後ろ姿がシルエットとなって湯面に揺れています。

「しまった！混浴だった――。」

慌てて内湯に戻ろうとすると、それを押しとどめるように、おばさんたちの一団が入ってきました。

「逃げないでいいんだよ、ここは昔から男女一緒に湯に浸かる場所なんだから……。」

「それにしてもいい体だねえ、何かやってるの？」

「え！ええ、高校で器械体操を少し……。」

「キカイタイソウ？」

「なに、あんた知らないの、オリンピックのあれでしょ？」

「じゃ、お兄さんも“月面宙返り”っていうの出来る？」

と言いながら、遠慮なしに肩や胸をペタペタ触ってきます。

「い、いやあれはトップクラスじゃないと……。」

そのうち、一団のボスとも思しき赤ら顔の大姉が正面に廻りこんできて、いきなり股間をギュッと握られたものですから、悲鳴をあげて飛び上がりました。

「あらいやだ！お兄さんお湯の中でギンギンよ・・・やっぱり若いのねえ。」

「そこを使って“月面宙返り”じゃない・・・きゃはははは。」

おばさんたちは徐々に馴れ馴れしく、ボディタッチは益々エスカレートします。

背中から尻の割れ目に沿って手を伸ばし、肛門の周りをまさぐる怪しからん輩も現れたので、
「―――済みません、もう上がります。」

立ち上がる肩を押さえて、「あんた、登別は初めてでしょ、もっとゆっくり浸かって行きなさい・・・私たち、これから宴会だから。」

赤ら顔の大姉が振り返り、「夜中寂しくなったら尋ねてくるんだよ、3階の菊の間だから・・・
・未亡人の柔肌でよけりゃ、筆おろすの手伝ってやってもいいからね・・・きゃははははは。」



おばさんの一団が風呂から上がり、ほっとして周りを見回すと、最前のシルエットの女性が、すぐ隣にいました。

驚いて声を上げようとした刹那、大姉同様いきなり私の股間をぎゅっと掴んで僅かに微笑み、左手を勝ち誇ったように高く上げて、拳の先に親指を突き出しました・・・。

驚いて立ち上がると、再び微笑みそのまま湯気の中に消えていきました。

阿寒のオーベルジュ（民宿）

“カメラ雑誌で見た3連サイロのある牧場で、牛乳を搾ってみたい——。”

北海道まで来たことで、この子供じみた“夢”が急に現実味を帯びてきました。

記憶の中の住所を頼りに、粉雪の舞う早朝の登別を後にして、室蘭本線のL特急で札幌を経由し、石勝線、根室線と乗り継いで、釧路で一泊した次の朝、阿寒行きの定期観光バスに飛び乗ったその車窓に、私の心を引き寄せる3連の大きなサイロを目にしたときは、ある種の運命さえ感じました。

躊躇いもなく、次の停留所でバスを降り、凍てついた雪道を15分ほど引き返します。

途中、穏やかなカーブの路肩で、雪にスタックした一台の軽トラに出会いました。

「——どうしました、押しましょうか？」

「ああ——助かるわ、じゃ手伝って。」

運転席には、白い肌が火照って赤い顔の、それでいて健康そうに目鼻立ちのはっきりした“マダム”がステアリングにしがみついています。

「きっと、側溝の蓋が雪の重みで潰れているのよ、女一人じゃどうしようもないわ。」

コンクリートの蓋が雪の重さで潰れるとも思えませんし、単に後輪が雪だまりで空転しているようでしたので、荷台に体重をかけてやると、車はゆっくり動き始めました。

「あんた、こんな雪道どこまで行くの？」

3連サイロの話をするので、「——じゃ送ってあげるよ、うちの近くだから。」

凍てついた草原のまっすぐな農道を暫らく軽トラに揺られていくと、やがて待望の3連サイロが見えてきました。

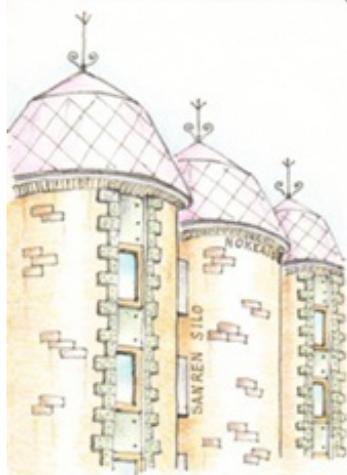
そのすぐ隣には、紅い大きな中折れ屋根の納屋が……夢にまで見た牧場の風景です。

でも、何か変です……牛や馬の鳴き声も、家畜特有の匂いもしません、酪農の気配が一切感じられません。

「なんだって？牛のちち搾りたいって……ここじゃ搾れないよ！」

「どうしてですか、ここは牧場じゃないんですか？」

「タワーサイロ使っている牧場なんてもう滅多にないんだよ——こりゃね、民宿なんだ、うちのオーベルジュの客室なんだよ。」



直径6 m程の、石積みのサイロの内部は、4層の床で仕切られた客室になっています。

3つのサイロのうち2つが客室で、鉄骨の渡り廊下で結ばれた真ん中のサイロは、天井まで大きな吹き抜けとなって、渡り廊下に接続する緩やかな螺旋階段が設置されています。

サイロに続く紅い中折れ屋根の本屋に客室はなく、1階に食堂と厨房、温泉を引き込んだ内湯と露天風呂、2階の屋根裏にオーナーであるマダム（女将）の寝室がありました。

部屋数8つの小さなオーベルジュだが、温泉の露天風呂があるのが評判で、夏場のシーズンは予約でいつも一杯なんだから、マダムは自慢します。

「どう？気に入った——2, 3日泊って行くか？安くしとくよ。」

食堂で、温かいココアをよばれながら、結局その通りにしました。

「他に、お客さんはいるんですか？」

「あんただけだよ。——流石に、この時期客は滅多に来ないよ、近くにスキー場もないし、阿寒湖のマリモセンターも休業中だしね。」

「ずっと一人でやっているんですか？大変じゃないですか。」

「夏場の忙しい時期は、弟夫婦に加勢に来てもらうけど……温泉が出るから他より楽なんだ、蒸気でたきもできるしねえ。」

「冬は一人で、寂しくないんですか？」

それをはぐらかすように……。

「それより、さっき牛の乳搾りたいって言ってたね、弟夫婦はこの先で酪農やってんだ、一日2回搾乳するそうだから、手伝わされるの覚悟で、明日の朝一緒に行ってみるか？」

願ってもない話でした。

阿寒の牧場

早朝の牛舎を蔽う濃厚な水蒸気は、全て牛や羊の吐く息です。
強烈なアポクリンの匂いがあたりに漂います。
嗅覚がそれに慣れた頃には、自らも同様な匂いを発するようになります。
不服そうに低く、満足そうに甲高く、牛たちは常に啼き続けます。
——まさに其処は、牧場でした。



「——姉貴の民宿に泊まっているんだって？」
牛同様の白い息を吐きながら、牧場のオーナーが話しかけてきました。
「はい、昨日からお世話になっています。」
「冬は誰も来ないんだ・・・何年ぶりかな。」
「でも、夏だけの収入じゃ、やっていけないんじゃないですか？」
「温泉があるから夏はかなり忙しいんだ、5年前に旦那が死んでから、ずっと一人だし、面倒見る子供もいないから、半年の儲けで何とかなるのさ。」
二人でサイレージを運びながら、オーベルジュの話がつづきます。
「俺たちの親父の時代は、あそこも牧場だったんだ。阿寒湖畔温泉の外れで昔から温泉が湧いていた、暖房や牛を洗うのに温泉使って燃料費が掛からないから、一時は随分羽振りが良かった。」
「それが、ある吹雪の夜、サイレージを満載したサイロのひとつが突然崩壊した、湿気を含んだサイレージの重さに耐えられなかったんだ。——雪の中の大音響だ、飼っていた牛がまったく乳を出さなくなってな、借り入れが返せなくて廃業した後を買い取ったのが、姉貴の旦那だ。」
「牧場を再建するつもりはなかった？」
「素人だしな・・・廃業をした牧場主と知り合いで、負債を買い取ってやったのが実情だ。」
「温泉が出るから、義兄としても民宿業で多少の勝算もあったんだろうが・・・。」
「あの3連サイロは、昔有名なカメラ雑誌に載っているのを見たことがあるんです。それで、牧場に憧れて・・・。」
「——大学生だって？」

「大学受験生です、試験が終わったから貯金をはたいて北海道に……。」

醗酵したサイレージを、バンカーサイロから三つある牛舎に一輪車で均等に運ぶのは、骨の折れる仕事です。

それでも牧場の一日の仕事の、ほんの一部に過ぎないのです。

「おかげで牛舎がだいぶ片付いた、民宿に帰ったら温泉浸かってきれいに匂いをおとしな、姉貴には宿代安くするよう言っとくから……。」

帰りの軽トラの中で――。

「――どうだった？牛のおっぱいの感触、ちゃんと搾れた？」

「はい、でも何だかブニャブニャして気持ち悪かった、考えていたのとは随分違うものですね。」

「バカねえ、あと何年かすりゃ人間の乳揉むことになるのよ、気持ち悪いなんて言ったら、張り倒されるわよ――。」

オーベルジュに帰り着いた途端電話がかかってきました。

「――大変だ！ねえあんた、もう宿代要らないから手伝ってくれない！」

「――どうかしたんですか。」

「新婚さん3組、今から泊まりに来るんだって！」

阿寒の夜のおもいやり

柔らかい檜の湯舟から溢れるかけ流しの湯が、細かいモザイクタイルの床を伝い、硫黄の香りと一緒に水蒸気となって、風呂場の天井に立ち昇ります。

洗い場から見える窓の外には、露天の岩風呂の湯気に混じって、白いものが落ちてきたようです。



脱衣場の引き戸が開く音がして、気が付くとオーベルジュの主人が入ってきました。

「あっ、マダム！ちょっと待ってください、今上がりますから……。」

前を押さえて慌てて上がろうとすると、「———待ちなさい、背中流しにきたんだよ、さあ腰下して、それにしてもいい体しているねえ。」

Tシャツに短パン姿のマダムはそれなりに色っぽくて、若い男の眼には大いに毒なのですが、そんなことにはお構いなく……。

「———なんだよ顔紅くして、裸みられるの恥ずかしいか？北海道の温泉は混浴が多いから、男も女も裸を見られることがよくあるんだ、男女の隔てなくお互いの背中流すのは、北海道じゃ当たり前のことなんだよ。」

そこで、登別の混浴の話をする、「それであんた、菊の間に筆おろしに行ったのかい？」

「ま、まさかマダム……。」

「ほら、また紅くなった。」

和やかな親しみが、湯気の中の二人を暖かく包み込みます。

「無理って手伝ってもらって申し訳なかったねえ、ベッドメイクから温泉の掃除までしてもらって……。」

「でも、あの短い時間であれだけの料理、大したもんですよ、味も最高だし一流ホテルと遜色ありません、マダムやっぱりプロですね。」

「感心した？———でもね、観光地だからカニや肉は仕入れるルートがちゃんとあるし、乳製品は弟の牧場で作ってるし、でも今回は急だったから……。阿寒湖畔の観光ホテルの空調設備が故障するなんて、誰だって考えないわよ。」

「あの3組の新婚さん、うまくやっていると良いですね、何をするのも二人一緒に、こっちはもうあてられっぱなしで困りました。」

「ごめんね、4組でいっぱいだから本当は西のサイロも準備して、二部屋づつに分けるんだけど

、暖房が起ちあがるのに時間がかかるのよ。　どこか観光でもしてきてくれたら、温める時間もあったのにね。」

「でも、阿寒湖でマリモも見れない、摩周湖もオフシーズンじゃ、道東の観光は諦めるしか仕方ないんじゃないですか？」

「いいのよ、もともと観光が目的じゃないんだから・・・昨夜は煩かったでしょ？」

「私はね、ああいうの見てると心配になる・・・というか、少し腹が立つの。　夫婦を続けていくのは、出会って恋して結婚するのとは、まったく別のエネルギーが必要なんだから。」

「というと？」

「夫婦というのはね、片方が一方的に相手を頼ることが必要なの、対等じゃうまくいかないのよ。　頼られる方は当然大変だし、頼る方も辛い・・・辛いから相手を思いやる事が出来るの、二つの人生を一緒に生きるんじゃなくて、ひとつの人生を二人で生きようと思うようになるの。」

「おもいやり・・・ですか。」

「まあ、あんたがスラスラ分かるようになるには、もう少し時間が必要だけどね。」

温泉から上がると、自宅から電話が掛かってきました。

明日の朝、自宅に向けて出発する旨、マダムに告げました。

――その夜の事です。

長風呂に疲れて横になった途端、不覚にも深い眠りに落ちて、気が付くとベッドサイドの背後に、白いガウン姿のマダムが佇んでいました。

「ど、どうしましたマダム？」

「寒くて眠れないの・・・ねえ、一緒に寝てくれない。」

さらりと、ガウンをとります・・・凍てついた夜気に白い肌が・・・全裸でした。

「そ、そんな・・・。」

「あんた、明日帰っちゃうんでしょ・・・。」

「ぼ、ぼくはまだ未成年ですから・・・。」

「男と女が、一緒に寝るのに、子供も大人もないわよ・・・ほら！」

冷たい裸が、寝床の中にするりと滑り込んできました。

「大学受験・・・どうだったの？」

「合格しました・・・。」

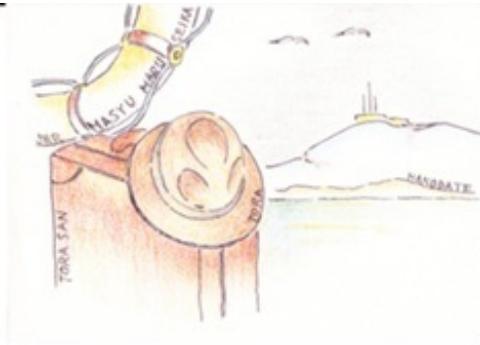
「よかったわね。」

青函連絡船“摩周丸”のプロムナードデッキから仰ぎ見る函館山が、海霞に消えてゆきます。青春の貴重な一週間を委ねた、白い北の大地に、今別れを告げようとしています。人の密度の希薄な、それゆえ、より一層ひとの温もりを希求し、そのような土地柄がときに男女の隔てをも超えて、人々の大らかさを育て、此の冷涼とした大地の、掛替えのない魅力となっています。

オーベルジュのマダムは、「夫婦は、片方が相手を一方的に頼り切ることが必要だ——。」
と言い切りました。
対等ではだめなんだって——。

40数年の時間を隔てて今振り返ると、当時の社会は、人が人を頼り切ることが出来得た社会だったともいえます。
今でいうボランティアや、近隣の互助が殊更特別に話題になることもなく、ごく普通に巷に存在した時代でした。
絆、助け合い、家族、思いやりといった言葉が、今ほど異様な重さを持つてはいませんでした。

水面に落としたインクの一滴が、やがて一様一面に拡がるように、人々の間のエネルギー密度の偏在（揺らぎ）は、時間と共に希釈されていきます。
社会に物とサービスが隔てなく普及し、人が人を頼ることがなくなり、同時に人と人との思いやりも委縮していく……。
熱力学の基本原理を持ち出すまでもなく、人間社会のエントロピーは止まることなく増大し続けるのです。
“そうじゃないだろ？個人資産の偏在は逆に大きくなるばかりじゃないか”と反論されるかもしれませんが。
“資産”は物やサービスの流れに対して逆行・集中しますが、それが人々の信頼や思いやりを育む、社会の揺らぎを生じさせることはありません。



そのような理屈も、17歳の青臭い心に咀嚼される筈もなく、ぼんやりと眼下を流れる白波を眺めていると……。

「兄さん、あの北の大地に何かよっぽど未練がありそうだねえ——好きな娘とでも別れてきたのかい？」

聞き覚えのある甲高い声で、ベージュのフェルト帽の下の四角い顔が、筋のような目に親しみを湛えながら、背後から声を掛けてきました。

「どうやら凶星らしいな……だったら兄さん喜びな、今あんたは人として一回り大きくなった。」

「人はみんな、人と別れることで初めて自分が分かるようになる、相手を自分の中に取り込んで、いつも一緒にいられるようになるんだ。——兄さんのいい娘は、これからずっと兄さんと一緒だ。」

その瞬間、何かが弾けて——。

「そうだ、そうなんです！僕は今この瞬間まで、あの北海道に恋をしていたんです。——そうなんです、今はっきり分かりました！」

海峡に消えゆく函館山のシルエットが、大粒の涙に歪みました。

おわり。

北海道（桃色の想いで）

<http://p.booklog.jp/book/103893>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/103893>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/103893>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ